

岡崎久彦先生の想ひ出

土屋 博

文語日誌(平成二十六年十二月二十二日)

小生、「文語の苑」の活動に参加するやうになりて、はや六年を経たり。その間、「文語の苑」定例幹事會の開催場所、常に岡崎研究所の會議室なれば、多忙を極むる先生にはありしかど、結果として格別の御高配、御指導に預かる幸運を得たり。

幹事會終了後、シニア幹事の御供をして先生のオフィスに立ち寄らば、談論風發して議論は止まるところを知らず。壁に掛かる數多の掛け軸の書、たとへば、伊藤博文、陸奥宗光、更には自書諸葛孔明の出師の表、又つい先ごろの、安倍晋三首相に捧ぐる集團的自衛權をめぐる自作の漢詩など、いと價值高きものなれど、小生如き團塊世代にとりては讀むことすら能はず。先生、朗々たる聲にて讀み方を教示せられ、懇切丁寧なる解説ぶりは格別に印象深し。

先生偶々時間ある時は、その足にて虎ノ門の「日本一と思ふ」焼き鳥屋、「外國人駐在員を常連とする」アイリッシュ・バーにお誘ひ頂くこともあり。研究所の永田町への移轉後は、溜池山王の居酒屋(大きな生牡蠣を推奨せらる)、獨逸風ビヤホールに一同をお連れいただくこともあり。今となりてはいづれも懐かしき思ひ出なり。

先生、相手の位、年齢の高き、低きにこだはず、分け隔てなく、皆に接せらる。とりわけ文語の苑の仲間との付き合ひは「何のしがらみも無き所こそ實に樂しけれ」と仰せられき。

小生、文語の苑小冊子の編輯擔當なれば、原稿執筆を御願ひすることも幾たびかあり。先生よりは依頼の翌日に原稿を他の誰よりも早く提出頂くを常とす。

或るとき先生より古書探索の旨承れり。小生、早速翌日インターネットにて検索し結果を御報せ申上ぐるに、先生、永年探したる書なればとて、大いに喜ばれたり。のちに先生、その間の事情をば文語作文「通俗二十一史」の中に言及せらる。曰く、「最近に至りて、土屋博氏なる古書發掘の達人あるを知りて、依頼せしところ、たちどころに、神田の古書肆にてわづか一萬八千圓にて入手せり」と。態々玉稿への御引用、恐縮の極みなり。

「通俗二十一史」は先生若き頃の愛讀書なりけるも、終戦直後の嚴しき經濟狀況の中、生活の爲古本屋に泣く泣く手放すてふ、先生にとりては思ひ入れ深き書籍なりき。後に先生、オフィスにて、小生一人のために、棚より「通俗二十一史」の一冊を取り出し、挿繪を示し、愛著ある一節を暗誦・朗讀せられたる姿、懐かし。

この夏には、和歌山文語シンポジウムの準備にとて、岡谷繁實「名將言行錄」第六卷(岩波文庫版)借用の御所望あり。早速持参したる際の先生の満面の笑みを忘るる能はず。先生は舊制中學(七年制府立高校)にて文語をしかと身に附けたる最後の世代に屬せらる。和漢洋に通じたる「知の巨人」と呼ぶに相應し。

先生御逝去の報に接し、その著作の幾つかを再讀す。處女作「隣の国で考えたこと」（中公文庫）は日韓關係を考ふる上に於きて今もその輝きを失ふ無し。傳記「陸奥宗光上下巻」（PHP文庫）は先生の代表作なり。「陸奥宗光とその時代」より「吉田茂とその時代」に至る「外交官とその時代」シリーズ五冊（PHP文庫）は、日本外交史を學ぶための必讀書なり。徳間文庫の岡崎久彦自選集①、②には、先生御自身の選ばれし論文を收む。新裝改訂版「百年の遺産」（海龍社）は偉大なる功績を遺せる先人たちの歴史祕話なり。そして、「教養のすすめ 明治の知の巨人に學ぶ」（青春出版社）は、百年前には歴史を變ふる本物の教養人ありき、とし、西郷隆盛、勝海舟、福澤諭吉、陸奥宗光、安岡正篤を擧ぐ。思へらく、先生を含む文語世代こそ今日の日本を築きけりと。